桃山・江戸前・中期の産衣十三領について　中

――近世小裁・中裁衣類調査報告　一――

神谷榮子

(5)　伝徳川綱誠所用白綾産衣（図版Ⅲa、挿図15～17）

松、竹、鶴、三つ盛亀甲、並び亀甲（二亀甲）の吉祥文様が地文になっている白綾の薄綿入産衣で、白絹糸の繡（ぬい）で徳川家の家紋丸に三つ葉葵紋が五ヵ所についており、それぞれの紋所には周囲に銀箔絵で松竹鶴亀が施してある。保存状態はよく、裂地も比較的上質であるが白綾の黄ばみ程度が著しい。

この産衣は概要でも述べたように薄浅葱小紋産衣(6)と共に尾張の徳川家に「泰心院様御誕生御式正呉服の内」として伝えられてきたものである。泰心院は尾張・徳川家の三代綱誠（つなのぶ）で、承応元年（1652）八月二日江戸市ヶ谷の鼠穴の館に於て尾張・徳川家二代光友の長男として出生、母は徳川三代将軍家光の女・千代姫である。

この産衣は、徳川秀忠の産衣(1)より七三年、毛利秀就の産衣(2)(3)(4)より五七年後のものになり、江戸前期のほぼ中間に位する時期のものであるが、袖が大きい（袖幅が広く、袖丈が長い）点を除くと、徳川秀忠や毛利秀就の桃山時代の四領の産衣に見られた初期小袖風な様相がこの産衣にも見られる（桃山・江戸前・中期の産衣十三領について　上、美術研究二六七号、一一、三頁表、図版ⅠⅡⅢ、挿図2、5、6、10、11、12、13、14照合）。即ち身丈（m）が短く、立褄（e、襟下）が短く、襟肩アキ（c）が狭い等で、われわれはこれらの点から江戸前期の半ば頃の産衣では、袖の大きさ以外は形態上は殆ど桃山時代の産衣と変らなかったことを知るのである。

この産衣の綾裂は、三つ盛亀甲、鶴、松、竹の文様の向が一方になっている上下の向が明瞭な裂であるが、裂の向に関しては別に統一や配慮は窺われないようである。即ち、背面は身頃と右袖は下向で左袖は上向になっており、従って前面の身頃と袖はその逆方向となるので[註14]、前面は身頃と右袖（向って左）は上向、左袖（向って右）は下向になっている。衽は上前、下前とも下向、襟は上前になる方が下向、従って襟裂は一続きの裂であるから下前は上向となっている。このように綾裂の地文の向は不統一で、裁断に当って地文の方向は考慮外であったことが知られる。

紋は白絹の撚のない平糸で行われた繡紋で、紋の周囲には五ヵ所とも

それぞれに銀箔絵で松竹鶴亀がつけられている。これら五ヶ所の松竹鶴亀の図様は、背面中央、背面左右（両袖後側）、両胸（この二つは左右の向が打ち返えしになっている）の三種類で、図様の高さは三種同一、幅と図形が多少異っている（図版Ⅲa、挿図15、16照合）。この銀箔絵は摺箔（すりはく）[註15]と同様な手法の型紙使用と目されるので、この五ヵ所の箔絵を施すに当っては似通った三種類の型紙が使用されたことがわかる。

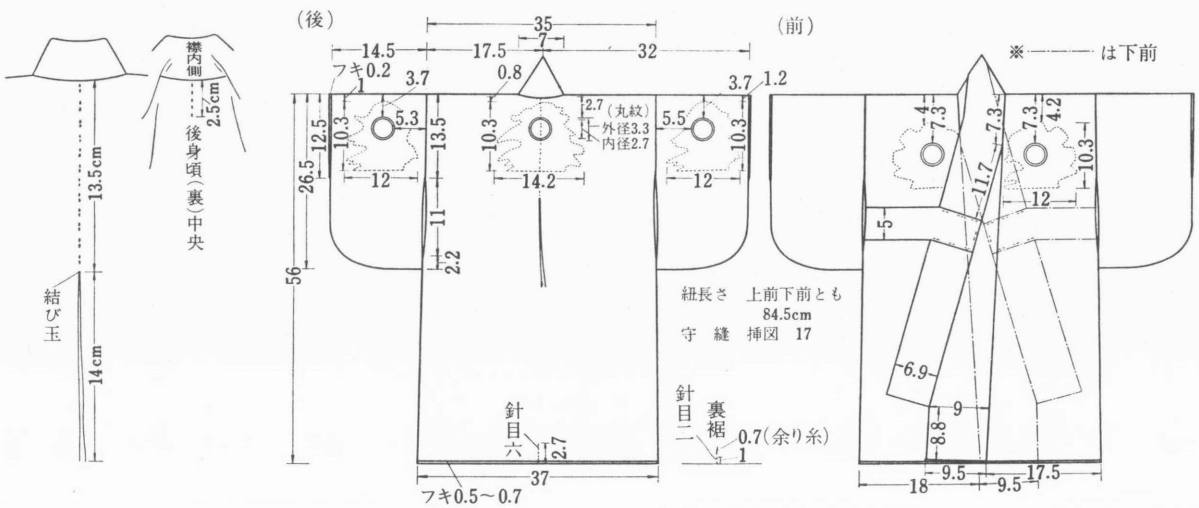
銀箔絵の松竹鶴亀も地文と同様の吉祥文様で、産衣につける文様としては、初生児が末長く健康で多幸であれと祈願する最も適切な文様である。

（形状、法量、仕立て方）

白綾の黄ばみが著しい以外は損傷もなく保存状態がよい。

形状、法量は一覧表（美術研究二六七号、二、三頁表）の(5)並びに挿図16、袖が大きい以外は徳川秀忠産衣(1)に形態の上で似ている小ぶりの産衣である。総重量は一八〇グラムの薄綿入れで、裏は白平絹の通し裏である。襟に

b　**挿図15**　a．伝徳川綱誠所用白綾産衣 (5) 背面部分　b．同　東京　徳川黎明会蔵（名古屋　徳川美術館保管）　a



挿図17　伝徳川綱誠所用白綾産衣 (5) 背面守縫実測図　　**挿図16**　伝徳川綱誠所用白綾産衣 (5) 実測図

は裏襟、附紐にも裏裂がついて、何れも身頃の裏裂と共の白平絹である。

この産衣では、室町・桃山期衣類には共通して認められた仕立て方上での鷹揚さが殆どなくなっており、左右相称の個所は大部分が左右同寸法、縫い方は丁寧、且つ整っているようである。

一つ身仕立てで後身頃は一幅の裂であるから背縫はなく、挿図15、17で見られるような守縫がS撚の白絹糸二本どりで行なわれている。二た目落としを裏面から見た裏針目の守縫、即ち今日でいう男児用産衣の守縫である。また裏裂にも守縫の位置に襟附縫の位置から下方に向って二・五センチ間に五針、表の守縫と同じS撚白絹糸で糸じるしのような針目がある。同様の糸じるし風な針目がやはり同じ糸で、背面裾中央に、表裂から裏裂に廻ってある。表側には裾から二・七センチ間に六針、裏側には裾から一センチ間に二針、計八針の針目があり、表裂から裏裂に廻った糸の余り糸が〇・七センチ裏側に出ている（挿図16）。

袖口、裾、振、身八つ口には袵があり、袖口袵は〇・二センチ前後、裾袵は〇・五～〇・七センチで褄先は剣先風に仕立ててあり、振と身八つ口の袵は〇・一～〇・二センチである。襟と紐は表裂と裏裂が突き合わせに縫い合わせてあるが、襟の方は裏裂が多少控えてあるようで、襟先は剣先風になっている。

袖口、紐通しの脇あき、裾、何れにも中入綿のとじはなく、また紐通しの脇あき、袖口等には補強のための留はない。

袖の丸みの作り方は外側からの触感による観察であるが、室町・桃山・江戸初頭の頃の袖の丸みの作り方と同様、袖口下から袖下へかけての袖の丸みの縫目が一本だけで、袖の丸みを整える糸入れはなく、縫代の角は糸でぎりぎり巻きに縛ってある（美術研究二二八号、二六頁、挿図15参照）。この袖の丸みの整え方は毛利秀就所用産衣三領（②③④）でも同様である。この産衣の袖下の縫代は左右とも今日の仕立てと同様に前側に入っている。

紐通し穴は挿図16の実測図に示したように左右ともに両袖の振が下方の二・二センチ間を身頃の身八つ口に前後ともくけつけてあり、袖の振と身頃の身八つ口が紐通し穴を兼ねた形になっている。

附紐は上前下前ともに、挿図16のように縫糸と同一のS撚白絹糸二本どりで表に二た目ずつ、裏側（襟の裏）に大針目が出て縫いつけられている。

仕立ては総体に丁寧で整っており、針目は縫目が〇・二センチ前後、くけ目が〇・四～〇・五センチである。縫糸はS撚の白絹糸である。

（表　裂）

比較的上質の白綾で、地文は松、竹、鶴、三つ盛亀甲、並び亀甲（二亀甲）が互の目風に組み合わされて並列している。文丈は打ち込みにむらがあるので六・五センチから八センチの間、窠間幅は六・三センチ前後である。この白綾は練りが少なく、黄ばみの程度も著しい。経糸、緯糸ともに撚がない。組織は綾で、地は経の六枚綾で右上り／、文は表の裏組織で緯の六枚綾で左上り＼、密度は一センチ間に、経糸は六〇本前後、緯糸は三二越前後である。

（裏　裂）

羽二重ようの柔い白平絹で、経糸、緯糸が同程度の太さである。経糸、緯糸の撚は不詳。密度は一センチ間に、経糸は四二本前後、緯糸は四二越前後である。

（紋所の紋様、大きさ、位置）

徳川家の丸に三つ葉葵紋で、紋様は、挿図15b、大きさは外径三・三センチ、内径二・七センチ、位置は挿図16の実測図照合。

(6)　伝徳川綱誠所用薄浅葱小紋産衣（図版Ⅲb、挿図18、21、22）

薄浅葱地に白抜きで宝尽し模様があらわされている小紋染の産衣で、裂地は羽二重ようの平絹で袷仕立てである。この産衣は前述の白綾産衣(5)と共に尾張の徳川家に「泰心院様御誕生御式正呉服の内」として伝えられてきたが、白綾産衣が徳川秀忠産衣(1)や毛利秀就産衣(2)(3)(4)等桃山時代の産衣のように身丈が短いのに対し、この産衣は身丈が極めて長く、この報告論文に取扱った産衣十三領の中でも最長で、江戸後期や現代の産衣と殆ど変らない長さである。また白綾産衣に比し袖丈も長く、その袖は振附になっているが、その他は形状・寸法に白綾産衣と大差はない(報告一、上、美術研究二六七号、二、三頁表参照)ので、この二領は用途の多少異った産衣(この小紋産衣は「ひら包」の名称で尾張・徳川家に伝来しており、その名称と、身丈袖丈が長く、附紐位置の低い形とを合わせ考えると着せたものというより覆いかけたもののように思われる)であって、伝来通り同一人物の所用になるものと見てよいであろう。

この産衣には紋所はないが、五つ紋の位置に同一の型紙を用いて糊置防染で白抜きにし、後で墨入れした松竹鶴亀の文様が配してある。その文様五個を貫くように白抜きに輪郭線が墨入れの太細二筋の子持の横縞が胸と背に通っている(図版Ⅲb、挿図18)。

この産衣より約五〇年ばかり後のものになるが、毛利家に伝来する毛利宗広(享保二年1717〜宝暦元年1751)所用小裁袴に薄浅葱小紋の長袴と半袴の二具があり(長袴一具は挿図19)、この小裁袴二具の小紋が、この産衣の小紋に似ており、更に袴の肩衣にはこの産衣にも見られる子持の横縞があって、双方互に想起させる好個の資料である。

この産衣の宝尽し文様小紋は、型紙一型の大きさは、幅は、この産衣の裂には型紙の横の継ぎ目が何処にも認められないので裂の最大の幅の見られる後身頃三五センチに両脇の縫代を加えた三七センチ以上(この産衣は袷であり、損傷部分もないので裏面が見えず、この産衣の後身頃に裂一幅が用いてあるかどうかも不詳である)、長さは写真(図版Ⅲb、挿図18)でも見られるように型を送った際の継ぎ目が明瞭であり、その間の長さは一一センチである。一枚型である。この小紋染の染法を概略考察すると、袷仕立てで損傷部分もないため表裂の裏面観察が不可能なため、当時の他の遺品資料

b　**挿図18**　a．伝徳川綱誠所用薄浅葱小紋産衣(6)背面　　東京　徳川黎明会蔵　　a
b．同　部分　　(名古屋　徳川美術館保管)

a　東京　細川護立氏蔵
(イ)肩衣部分
(ロ)同

から考察される藍で染色した小紋の例[註16]、並びに表裂の表面から見た白抜きの部分の状態から推測すると次のようになる。子持筋の部分と松竹鶴亀の五ヵ所は、先ず最初に行われた両面糊置で、一一センチの長さの一枚型を用いて型附した宝尽しの小紋は片面糊置と思われる。防染糊乾燥後、藍の浸染を行い、これは薄い藍に三浴か四浴させた程度の色の濃さであると考えられる。

（形状、法量、仕立て方）

損傷も褪色も殆ど見られない保存状態のよい産衣である。

形状、法量は一覧表（美術研究二六七号、二、三頁）の(6)並びに挿図21、振附の長く大きい袖と、長い身丈が、江戸前期の武家の産衣としては珍しく、且つ目立つ産衣である。総重量は九〇グラムの袷で通し裏がついている。裏裂は表裂と同じような手ざわりの柔かな羽二重ようの平絹で、色は表の薄浅葱より更に濃度の薄い水浅葱である。白綾産衣(5)と同様に襟には裏襟、附紐にも裏裂がついており、何れも身頃の裏裂と共裂である。

この袷の仕立て方は、上杉謙信、上杉景勝所用の服飾類等、室町・桃山・江戸初頭頃の袷仕立ての衣類[註17]に共通して見られた四つ縫の方法が行なわれている。即ちこの一つ身仕立ての産衣では、脇縫、衽附、袖口下、袖附に四つ縫が行なわれ、襟附は襟の表裂と身頃の表裂・裏裂とが三つ縫され、襟の裏裂はくけつけてある。従って袵は襟先に〇・五センチ、立褄（襟下）に〇・七センチある（襟先と立褄の裾の尖端は剣先風になっている）だけで、四つ縫の個所はすべて突き合わせである。

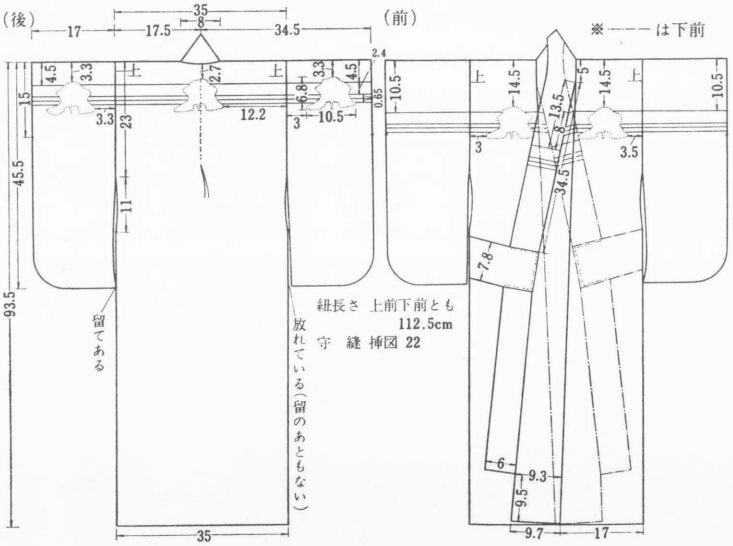
この産衣でも白綾産衣(5)と同様、室町・桃山期特有の仕立て方上での鷹揚さは殆ど認められず、左右相称の個所は大部分は左右同寸法である。

一つ身仕立てで後身頃は一幅の裂であるから背縫はなく、図版Ⅲb、挿図22

a．伝細川忠利所用浅葱小紋袴
b．同

b　**挿図20**

挿図19　伝毛利宗広所用小裁薄浅葱小紋長袴
防府　毛利博物館蔵



挿図21　伝徳川綱誠所用薄浅葱小紋産衣 (6) 実測図

挿図22　伝徳川綱誠所用薄浅葱小紋産衣 (6) 背面守縫実測図

で見られるような守縫が縫糸と同一のS撚薄浅葱絹糸二本どりで行なわれている。二た目落としを裏面から見た裏針目の守縫で、今日でいう男児用産衣の守縫である。白綾産衣には裏裂にも背と裾に糸じるし風な守縫ようのものがあったが、この産衣には裏裂には全くない。

補強のための留はなく、左袖の振の下端が身頃の脇に留めつけてあるが、左袖の振は放れており、留めつけた針目の跡も見当らない。

袖の丸みの作り方は白綾小袖と同様で、この場合は袖口下から袖下にかけての縫は四つ縫がしてあるが、外側からの触感による観察では、室町・桃山・江戸初頭の頃の袖の丸みの作り方と同様、袖口下から袖下へかけて袖の丸みの縫目は四つ縫の糸が一筋だけで、袖の丸みを整える糸入れはなく、縫代の角は糸でぎりぎり巻きに縛ってある(美術研究二二八号、二六頁、挿図15参照)この袖の袖下の縫代は左右とも今日の仕立同様前側に入っている。

附紐は上前下前ともに剣先より三四・五センチ下方に、挿図21のように、縫糸と同一のS撚薄浅葱絹糸を二本どりにして縫いつけてある。

仕立ては総体に丁寧で、針目は縫目が〇・二センチ前後、くけ目は〇・四センチから〇・五センチである。縫糸はS撚の薄浅葱絹糸である。

(表　裂)

宝尽し文様が白抜きになっている薄浅葱小紋染平絹で、羽二重ようの手ざわりの柔かな目のつんだ生地で、経糸も緯糸も糸が太く、緯糸の方が経糸よりも更に太い。密度は一センチ間に、経糸は四六本前後、緯糸は三六越前後である。後染で、この小紋染に関しては前述した通りである。

(裏　裂)

表裂よりも色の濃度の薄い水浅葱平絹で、羽二重ようの手ざわりの柔かな目のつんだ生地で、経糸、緯糸ともに表裂よりやや細い。表裂同様緯糸の方が経糸より幾分太い。密度は一センチ間に、経糸は四八本前後、緯糸は四六越前後である。藍の後染で、薄い藍に一浴か二浴した浸染と考えられる。

(7)　伝伊達綱村所用樺色網干に貝模様友禅産衣

(図版Ⅰ・Ⅱa、挿図23、27、28、29)

(7)伝伊達綱村所用樺色網干に貝模様友禅産衣、(8)伝伊達綱村所用白羽二重産衣、(9)伝伊達吉村所用浅葱宝尽し模様友禅産衣の三領は、仙台藩士であった平野家に伝来し今日に至ったものである。平野家は古くから

仙台藩の陰陽師で、家伝によると平野家の祖先は陰陽師という職種柄、藩主より記念品的褒賞を賜る機会が屢々あり、この三領の産衣もそういったいわれのある伝来品中の三点である。[註18]

これら三領の産衣の中「樺色網干に貝模様友禅産衣」(7)と「白羽二重産衣」(8)の二領は、伊達政宗の曽孫に当り、政宗から数えて四代目の仙台藩主伊達綱村の所用といわれており、「白羽二重産衣」(8)は「樺色網干に貝模様友禅産衣」(7)の下着とされている。

伊達綱村は、万治二年(1659)三月八日、三代仙台藩主伊達綱村の第一子として江戸第に出生、母は側室の三沢氏初子である。[註19]

この五つ紋のついた友禅染産衣は、紋は仙台伊達家正式の家紋竹に雀紋が染め抜きになっており、表は平絹に友禅染で海辺の模様があらわしてあり、附紐も表裂と共の友禅、裏は紅平絹の通し裏、薄綿入れである。

仙台伊達家の正式の定紋は、竹に雀の丸紋で、上杉家から伝えられたものといわれるが、[註20]上杉家の竹に雀の丸紋[註21]とは一見して図様を異にする。即ち挿図23cに示したように二本の竹を用いて竹丸を形成し、竹丸の内に飛雀を相対させる。竹の幹には各幹四節十数葉を左右に出し、特に竹の葉には露点を施す。[註22]この産衣の紋は「御召御紋帳」所載の伊達氏家紋と同一で、(9)伝伊達吉村所用浅葱宝尽し模様友禅産衣の五つ紋とも、中村恭子氏発表論文「伊達藩の服飾——伝伊達政宗所用陣羽織について(2)——」[註23]所載の伝伊達政宗所用紫羅背板地五色水玉模様陣羽織（伊達家伝来、現、仙台市博物館所蔵）の背紋とも同一の紋様である（二本の竹を用いた竹丸で、竹丸の内に飛雀を二羽相対させ、竹の幹は各幹四節、葉は各幹に二六葉——外側に一五葉、内側に一一葉

a

b

c

挿図23　a．伝伊達綱村所用網干に貝模様友禅産衣 (7) 下前
b．　同　上　背面左上部分
c．　同　上　右袖背面部分（紋所）

――、竹の葉の露は各幹に八点――外側に六点、内側に二点――である)。

この凹凸の多い複雑な図様の家紋が、五つ紋として表裂に、友禅染の白あげ部分と同様に糊置防染法で輪郭も鮮明に白抜きになっており、紋の輪郭線や露の墨入れは、友禅の墨入れと同様に繊細に加筆されている。

またこの産衣に見られる友禅染の模様は絵羽(えば)[註24]で、下前(挿図23a)や附紐に至るまで模様は極めて凝っている。この海辺の模様は、樺色地に、白場や糸目[註25]の白抜き部分や、浅葱、薄浅葱、萌黄、薄萌黄、黄土色、白に近い薄紅(ほのかな薄紅といったこの色は、貝と紋所の竹の幹と雀にかすかに差してある)、鼠色等の色差し[註26]、墨の線描とぼかし並びに藍蠟の線描(網干の尖端の木の枝の輪郭線が藍蠟の線描と糸目)の描き起こしで、上半には巻貝、蛤、いたや貝、あわび等の貝づくし模様を、裾には波頭状に扱った網干の模様を染めあらわしている。

これらの模様を観察すると、上半の貝づくしでは、貝の中から海藻が生え出しているが、このような海藻が生えた貝の模様は桃山時代から江戸前期にかけて非常に流行しており、挿図24に示したのは流行期の染織品に見られる数例であるが、この模様の流行は染織品に限らず漆工品、そして刀の鍔や小道具類の金工品にも屢々見られるところである。また裾の網干は、筍か波頭を思わせるような形で、このような網干模様は、江戸前期の小袖の模様に多い図柄である(挿図25に二例)。この産衣の網干模様は、まだ木の枝に網を懸けた原形がよく残っているが、挿図25の二例は寛文(1661~1672)から元禄(1688~1703)頃にかけてのもので、ここでは網干の形は筍形に変り、木の枝は筍の皮の尖端のように変形している。

挿図24　a. 花鳥貝模様辻ケ花染裂　桃山時代
b. 島取りに花蛤模様辻ケ花染裂　桃山時代
c. 海藻に貝模様繍箔　桃山時代
d. 貝尽し海藻模様唐織　江戸前期

こうした図様の上半と裾の絵羽模様を通して見ると、そこには如何にも寛文の大模様に繋る動きのある面白さが窺われる。

a　江戸前期　東京国立博物館蔵
江戸前期　京都　栗山吉三郎氏蔵

b

挿図25　a．黒綸子地網干に波鴛鴦模様小袖
b．白綸子地岩に網干模様小袖

また貝の部分には辻ヶ花染に見られる繊細な墨の線描も加えられており、辻ヶ花染の年代をさして下っていないことを思わせる。

そして染の技術は、素朴ではあるが明らかに糸目を引いた友禅染であり、色差しには加賀友禅風[註27]なぼかしや色調が多く用いられている。この産衣に見られる友禅染の技法は、糸目は比較的太く、糸目の状態から推測して、筒糊[註28]ではなく楊子糊[註29]のようである。糸目糊を引いた後行った色差しは顔料系のものを用いたように観察される。糸目糊を引き色差しの行われた部分と紋、貝、その他の白あげの部分（線描きやぼかし等の墨入れは染め上ってからの描き起こし）に伏せ糊[註30]を施して防染し、乾燥後、伸子（しんし）に張って地染を引染[註31]で行っているようである。この地染の樺色は、模様と地色の境に処々、僅かではあるが黄色の部分が見られ、これは地色の上掛の染料が掛らなかった部分の下染かと考えられる。即ちこの地色の樺色は刈安か何かの黄色の下染が先ず引染でなされ、次にその上を楊梅皮（もも かわ）か何か茶色の染料で上掛けが引染なされたと観察される（この地色の樺色は一見紅が褪色したような色であるが、縫目の内側や紐附の内側など蔭になっている部分を当った結果、紅染の場合だと当然そういう蔭の部分のどこかに紅い色が残っているものだが、この産衣の場合は蔭になっている部分も表面の地色と全く同じ濃度の樺色であったから紅染の褪色ではない）。

挿図26　紫式部石山寺に月を愛でる図友禅染掛幅
享保五年銘　東京国立博物館蔵

この産衣は仕立ても「うぶ」であり、伝徳川綱誠所用産衣(5)(6)より七年時代の下るものであるが、伝徳川綱誠産衣二領に形態も極めて似ており、製作当時の古様をよく残しているといえる。

以上考察を進めてきたように、この産衣は確実性ある伝来で、紋所も仙台伊達家の正式の家紋であり、産衣の形態、模様等から判断すると江戸前期、それも伊達綱村出生の万治二年当時のものであろうことは充分に裏附けられるので、この産衣は伝来通り四代仙台藩主伊達綱村所用といえるであろう。

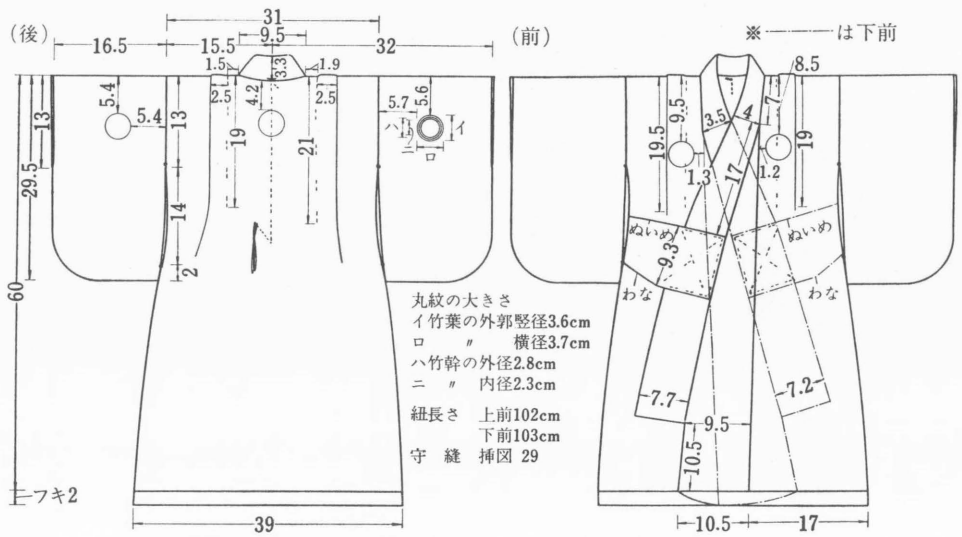
ところで従来、友禅染は元禄頃に創始されたのであろうといわれてきており、その遺品資料も確実な裏附けのある古いものがなく、これまでは「享保伍庚子六月十五日加劔御門前町染所茂平」の銘が白抜きに染め出されている「紫式部石山寺に月を愛でる図」という友禅掛幅（挿図26）が確実性のある初期の友禅染遺品資料とされてきた。しかるにここに四代仙台藩主伊達綱村所用という所用者の決定的な友禅染産衣が明らかになり、そこに見られる友禅染技術は素朴ながら、元禄初頭を溯る約三十年前にこのような友禅染が行われていたことは、近世染色の一つの規準を新たに示したといえるであろう。

（形状、法量、仕立て方）

前身の胸もとに上前下前とも比較的広範囲に目立たないしみがある以外は損傷も褪色も汚れも殆どない保存状態のよい産衣である。

形状、法量は一覧表（美術研究二六七号、二、三頁）の(7)並びに挿図27、袖は紐通しの穴にしては袖の脇の部分のあきが長大で、仕立ての上からも振附小袖であるが、振の下端が左右とも前後に二センチずつ身頃脇にしっかと縫いつけてあるので(9)伝伊達吉村所用浅葱宝尽し模様友禅産衣と共に(5)伝徳川綱誠所用白綾産衣も仕立ての上では振附小袖）全体の形状の上から見て振附小袖とはせず単なる小袖として一覧表に示した。また十三領中この産衣と(9)伝伊達吉村所用産衣の二領だけに肩あげがある。総重量一九八グラムの薄綿入れで、手ざわりの柔かな紅平絹の通し裏がついている。襟にはその裏裂と共裂の裏襟がついている。附紐は写真でも見られるように裏裂はなく表裂と共の友禅染の裂が二つ折りにして用いてある。

この産衣の年代になると仕立て方も相当に整って来ているらしいが、初期小袖時代の仕立て方上の鷹揚さが、室町・桃山期の仕立てほどで

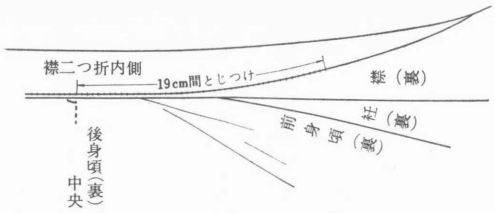


挿図27　伝伊達綱村所用樺色網干に貝模様友禅産衣 (7) 実測図

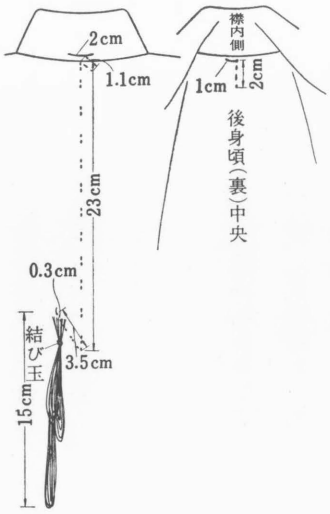
はないが諸所に見られ、左右相称の個所にも〇・五センチから一センチの差が約半数に見られる。しかし縫い方は比較的丁寧で且つ几帳面さが認められる。

一つ身仕立てで後身頃は一幅の裂であるから背縫はなく図版Ⅰ、挿図23ｂ29で見られるような守縫がS撚紅絹糸二本どりで行なわれており、挿図23ｂ29で見られるように、これには守縫のすぐ上に襟附線から〇・二センチ上ったところに同じ糸で二センチ間に糸が渡してある。守縫は二た目落としを裏面から見た裏針目の守縫で、今日でいう男児用産衣の守縫である。また裏裂にも守縫の位置にS撚白絹糸で二センチ挿図29のような糸じるし風な守縫的なものがある。

襟は背縫の延長線の位置で内側に二つ折りにし、左右それぞれ一九センチ間に折り込み分を笹の葉形に消してあり（挿図28参照）、内側に折り込まれた分は約一センチの針目でとじつけてある。ただし前は笹の葉形の先端は一〇センチほど、とじた糸は失われて跡が見られるだけである。この産衣の下着といわれている(8)伝伊達綱村所用白羽二重産衣もこの産衣同様な方法で襟首囲りが二つ折りにされている。



挿図28　伝伊達綱村所用樺色網干に貝模様友禅産衣(7)襟首囲り見取図



挿図29　伝伊達綱村所用樺色網干に貝模様友禅産衣(7)背面守縫実測図

袖口、裾、振、身八つ口には袵があり、袖口袵は〇・五センチ前後、裾袵は二センチ前後で褄先は剣先風に仕立ててあり、振と身八つ口の袵は〇・一～〇・二センチである。襟は裏裂が多少控えてあるようであるが、襟先は図版Ⅱａで見られるように表裂が控えてあり弓形に弧を描いている。

袖口綿は裏袖の袖口の袵にふくませてあり、約一・二センチ内側に入ったところに約二～二・五センチ間隔に紅絹糸で袵とじがしてある。脇あきや裾には中入綿のとじは見られず、また紐通しの脇あき、袖口等には補強のための留はない。

袖の丸みの作り方は外側からの触感による観察であるが、室町・桃山・江戸初頭の頃の袖の丸みの作り方と同様、袖口下から袖下へかけての袖の丸みの縫目が一本だけで、袖の丸みを整える糸入れはなく、縫代の角は糸でぎりぎり巻きに縛ってある（美術研究二二八号、二六頁、挿図15参照）。この産衣の袖下の縫代は左右とも今日の仕立てと同様に前側に入っている。

紐通し穴は挿図27の実測図に示したように左右ともに両袖の振が下方の二センチ間を身頃の身八つ口に前後ともくけつけてあり、袖の振と身頃の身八つ口が紐通し穴を兼ねた形になっている。これは(5)伝徳川綱誠所用白綾産衣と大きさは異るが形は同様である。

附紐は上前下前ともに、挿図27のようにS撚紅絹糸二本どりで表に二た目ずつ、裏側（襟の裏）に大針目が出て縫いつけられている。挿図27の実測図に示した位置に肩あげがある。

仕立ては総体に丁寧で整っており、針目は縫目が〇・二～〇・三センチ、くけ目が〇・七～〇・八センチである。縫糸はS撚の紅絹糸である。

（表　裂）

友禅染の平絹で、生地は薄手で、手ざわりが柔かな不二絹のような感触で、織目がよく揃い、よくつんでいる上質の裂である。経糸と緯糸は太さがほぼ同じで、密度は一センチ間に、経糸は五〇本前後、緯糸は五四越前後で

ある。貝模様と網干の海辺模様が絵羽になっており、友禅染で染めあらわされている。前述した（一八頁参照）ように地色の樺色は紅の褪色ではなく黄色の下染と茶色系の上掛けによった樺色である。

（裏　裂）

後染の紅平絹で、地質は表裂と同様に不二絹のような感触であるが、表裂ほどは上質でない。経糸は緯糸にくらべてやや細く、密度は一センチ間に、経糸は五〇本前後、緯糸は五〇越前後である。

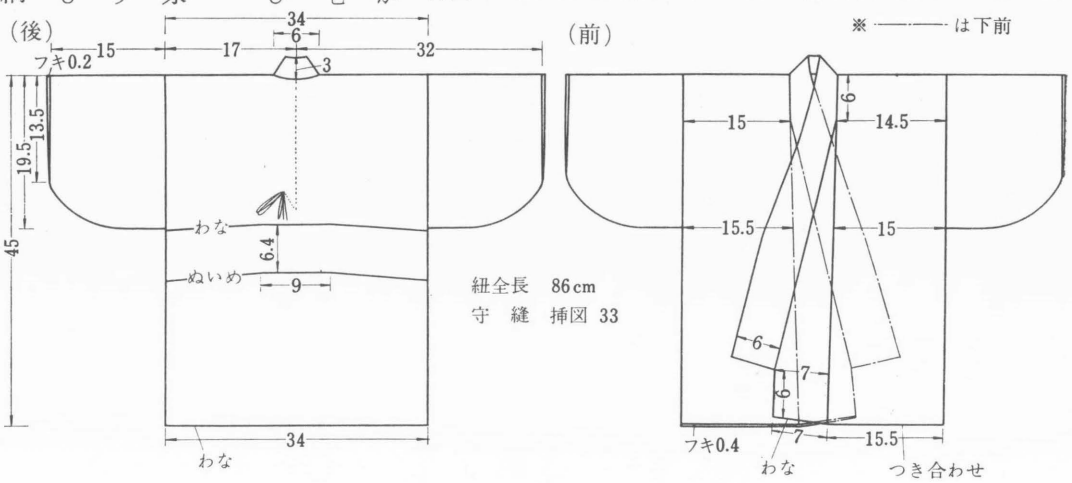
（紋所の紋様、大きさ、位置）

仙台伊達家の正式の家紋で、竹に雀の丸紋（挿図23 c）。二本の竹を用いた竹丸で、竹丸の内に飛雀を二羽相対させ、竹の幹は各幹四節、葉は各幹に二六葉――外側に一五葉、内側に一一葉――、竹の葉の露は各幹に八点――外側に六点、内側に二点――である。この産衣の丸紋の大きさは外径は竹の幹の外側で二・八センチ（外側の葉までは竪が三・六センチ、横が四センチ）、内径は竹の幹の内側で二・三センチ、位置は挿図27の実測図照合。

(8)　伊伊達綱村所用白羽二重産衣（図版Ⅱb、挿図30～33）

これは(7)伊伊達綱村所用樺色網干に貝模様友禅産衣の下着といわれて伝来したもので、表裏共裂の白羽二重で出来ており、背に身頃と同じ地質で紅染の附紐がついている。(7)の下着として襲ねると、裄、身幅、袖幅、襟肩あき、襟幅の寸法が程よく控えて（美術研究二六七号の二、三頁一覧表(7)(8)、及び本号挿図27、31の実測図照合）仕立ててあるようで、小気味よいばかり見事に襲なり合うので、これは伝来通り紛れもない(7)伊伊達綱村所用樺色網干に貝模様友禅産衣の下着であろう。

（形状、法量、仕立て方）



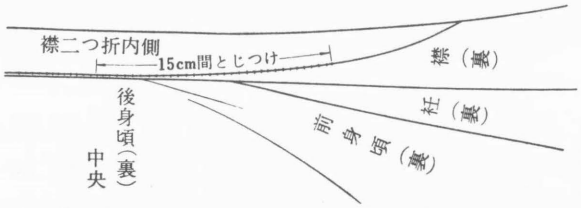
挿図30　伊伊達綱村所用白羽二重産衣 (8) 背面　東京　平野実氏蔵

挿図31　伊伊達綱村所用白羽二重産衣 (8) 実測図

損傷も汚れも殆どなく保存状態はかなりよい。形状、法量は一覧表（美術研究二六七号、二、三頁）の(8)並びに挿図31。総重量七二グラムの小ぶりな薄綿入れで、裏は表と共裂の白羽二重である。後身頃は表が裾でわなになって裏に引きかえしになって続いており、上前の前身頃は裾が表と裏と突き合わせになっており、下前の裾には○・四センチの袍があり、衽の先は剣先風になっている（挿図31）。

一つ身仕立てであるから背縫はなく、挿図30、31、33で見られるような守縫がS撚白絹糸二本どりで行なわれている。二た目落としを裏面から見た裏針目の守縫、即ち今日でいう男児用産衣の守縫である。

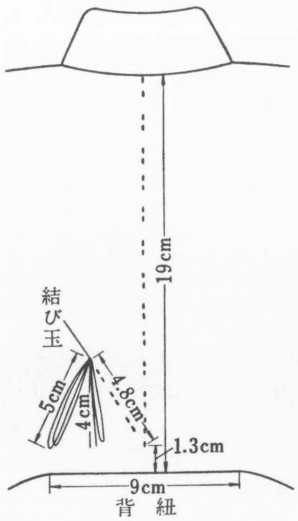
これの上衣と伝承されている(7)伝伊達綱村所用樺色網干に貝模様友禅産衣の襟と同様の方法の襟首囲りで、襟は背縫の延長線の位置で内側に二つ折りにし、左右それぞれ十五センチ間に折り込み分を笹の葉形に消してあり（挿図32、挿図28照合）、内側に折り込まれた分は○・五センチの針目でとじつけてある。



挿図32　伝伊達綱村所用白羽二重産衣 (8) 襟首囲り見取図

袖口、裾等には中入綿のとじはなく、また補強の留も何処にもない。

袖の丸みの作り方は外側からの触感による観察であるが、室町・桃山・江戸初頭頃の袖の丸みの作り方と同様、袖口下から袖下へかけての袖の丸みの縫目が一本だけで、袖の丸みを整える糸入れはなく、縫代の角は糸でぎりぎり巻きに縛ってある（美術研究二二八号、二六頁、挿図15参照）。この産衣の袖下の縫代は左右とも今日の仕立てと同様に前側に入っている。



挿図33　伝伊達綱村所用白羽二重産衣 (8) 背面守縫実測図

紅絹の附紐は紐の中央部分が背にくけつけてあり、紐は後から前にまわして結ぶようになっている。附紐の位置は挿図31 33に見られるように、背面の襟附中央から十九センチ下方で、紐はわなが上に縫目が下に、上下とも中央九センチ間が表に針目が出ないようにしてS撚赤絹糸一本どりでくけつけてある（くけつけてあるのは紐の上下だけで、左右はそのままあけてある）。

仕立ては総体に丁寧で整っており、針目は縫目が○・二センチから○・三センチ、くけ目は○・五センチ前後である。縫糸はS撚白絹糸である。

（表裂、裏裂、紐裂）

表、裏、紐は同一の地質の平絹で、上質の羽二重である。手ざわりが柔かで、表裂、裏裂は白、紐は紅の後染である。経糸は緯糸よりもやや細く、密度は一センチ間に、経は五〇本前後、緯は四〇越前後である。経糸、緯糸ともに撚は不詳である。

註

14　和服には肩山線、袖山線に縫目がなく（くりまわしの仕立て替えその他特別な場合には肩山、袖山に縫目があることもある）、身頃も袖も前後が一続きの裂である。従って模様に向の上下がない場合はよいが、向の上下が明らかな場合は肩山線、袖山線を境に、片面が逆の向きになる。

15　「摺箔」は印金の技術から発達したものといわれており、型紙を用いて漆や糊で裂地の上に模様を置き、その上に金箔、銀箔を置いて摺りつける。このような方法で裂地に金箔、銀箔の模様をつけたもので、室町末、桃山、江戸初期に非常に多く用いられた。

16　伝徳川家康所用小紋裃、伝細川忠利所用小紋裃の中の藍染の分（挿図20）、伝徳川綱誠所用小裁藍染裃、伝毛利宗広所用小裁藍染裃二具（挿図19）の例では、何れも紋所、小持筋等、大きい面積の白抜部分は表裏両面に糊置が行なわれているようである。

17　上杉謙信所用といわれている「浅葱紬裏紅練緯袷小袖」「浅葱綾竹雀紋繡襟摺箔描絵胴服」「金銀襴緞子等縫合胴服」「はぐま毛陣羽織」「緋雲文緞子陣羽織」「白雲文緞子陣羽織」「紺・緋羅紗袖替り陣羽織」「緋羅紗陣羽織(裏・黄緞子)」「緋羅紗陣羽織(裏・浅葱緞子)」(以上は美術研究二二八号、二四三号、二一六号、二五九号、上杉家伝来衣裳―講談社発行―の筆者の論文及び図版解説参照)、上杉景勝所用といわれている「紺麻地鐶繋ぎ矢車文鎧下着」(上杉家伝来衣裳の図版解説参照)、上杉家の家臣直江兼続所用といわれる「薄浅葱花文緞子胴服」(上杉家伝来衣裳の図版解説参照)等に室町・桃山・江戸初頭頃の袷仕立ての衣類に共通して見られる四つ縫の方法が行なわれている。

18　平野実氏が幼少時より父祖から直々に聞かれたことと、平野家に伝来する系図その他の記録をもとに記述された「家についての覚」(序文の日附は「昭和二十年七月七日、第二百四十回家の記念日に当りて」となっている)、並びに平野実氏の御長男で現在読売新聞編集局整理部に御勤務で鳩ヶ谷市文化財保護委員の平野清氏に伺ったところによる。

19　四代仙台藩主伊達綱村(万治二年1659三月八日～享保四年1719六月二十日)は、はじめ綱基といい、幼名は亀千代丸である。生母は浄眼院三沢初子で、三代仙台藩主伊達綱宗の側室であったが、綱宗は正室を持たなかったので、亀千代丸は正室に生まれた第一子も同然であった。父綱宗の蟄居によって二才で封を継いだが、この頃いわゆる伊達騒動が起った。歌舞伎で知られた伊達騒動の幼主亀千代で、生母の三沢初子は芝居では乳母の政岡になっている。

20　沼田頼輔著「日本紋章学」六二七頁。

21　美術研究二二八号、二三三号、二四三号の「伝上杉謙信所用小袖十二領」「伝上杉謙信所用胴服八領　中」参照。

22　沼田頼輔著「日本紋章学」六二七頁。

23　「聖和」第八号―聖和学園短期大学、昭和四十四年十二月発行―。

24　「絵羽」というのは絵模様をあらわした着物や羽織で、その絵模様が背縫、脇縫、衽附、袖附、襟附等の縫目を渡って描かれているのが特色。現今のものでいうと裾模様、肩裾模様の式服や訪問着が好例。

25　「糸目」というのは、友禅染の模様の中に見られる白い細い線で、この産衣の友禅染では、網干の網や紐、巻貝やあわび、いたや貝の輪郭線、海藻等に見られる白い線である。このような白い細い線を裂に染め抜くために友禅染では、糸目糊という糸目専用の防染糊を楊子や筒で、青花で描いた下絵に従って裂の上に置いていく。糸目糊を裂の上に置く際に、糊が楊子や筒から引かれるような状態で置かれるので「糸目を引く」という言葉が使われている。

26　「色差し」というのは模様部分の着色を行なうことで、筆や刷毛に染液(染料又は顔料を溶かした液)をつけて絵を描くと同様に描いていくことで「色挿し」と書くこともあり、単に「差し」「挿し」ということもある。

27　「加賀友禅」は京友禅(加茂川染ともいわれる)に対する加賀友禅で、加賀の金沢で発達したといわれている。技法の上では京友禅と異るところはないが、配色に燕脂、紫、緑、藍の色を多く用い、一つの単位模様の中に数種の色を染め分け、ぼかしを巧みに扱い、色彩や模様の趣は京友禅よりも便化され図案化されており、更紗や琉球の紅型との直接的な交流を想わせるものがある。ただ加賀友禅という言葉は古い時代には全然見られず、また現在残っている古い友禅染の資料は加賀調のものが圧倒的に多いので、果してこれら加賀調のものが全部加賀で出来たものかどうかは疑問である。

28　「筒糊」というのは尖端に小さな穴があけてある渋紙製の円錐筒に糸目糊(註25参照)を入れて糸目を引くことをいう。今日の友禅染では糸目は殆どが筒糊で行なわれている。

29　「楊子糊」というのは糸目を引く道具に筒(註28参照)を用いず、長さ十二、三センチの楊子状の棒を用いる方法をいい、その棒の尖端に糸目糊(註25参照)をつけて糸目を引く。友禅染の遺品資料には古くは屢々行なわれている様子が窺われるが、現代では故山田栄一氏(明治三十三年1900十二月十七日生～昭和三十一年1956八月十一日歿、昭和三十年三月十九日に友禅染の楊子糊技法で重要無形文化財保持者に指定された)を最後に殆ど行なわれていない。

30　「伏せ糊」というのは地染に備えて模様部分に置かれる防染糊のことで、色差し(註26参照)が完了した模様部分に置かれる。糸目糊(註25参照)よりも柔らかく別名「べた糊」ともいう。

31　地染には浸染と引染とがあるが、友禅染では裂を伸子に張って平刷毛で染液をつける引染が行なわれる。